こまったときの親鸞聖人

安田 登（やすだ のぼる）
能楽師（下掛宝生流：ワキ方）
寺子屋 講師　（阿弥陀寺）
こどもおばけ合宿 講師　〃
主著に『論語』『あわいの時代』『あわいの時代の『論語』ヒューマン2.0』『能　650年続いた仕掛けとは』他多数。

イラスト　中川 学

お盆を考える

▼小泉八雲の朝ドラ

NHKの朝ドラ、九月からは『ばけばけ』が始まります。

主人公は、小泉セツさん。明治時代の人で、「雪女」や「耳なし芳一」などの『怪談』で有名な小泉八雲の奥さんです。ご主人の小泉八雲は、生まれはギリシャ、育ちはアイルランドの人で、本名はラフカディオ・ハーンです。

明治時代には、政府に招かれて多くの外国人が日本に来ました。しかし、多くの外国人は「俺たちが日本人に教えてやるんだ」という上から目線。「雪女」などの日本の民話や伝説を聞いても「非科学的」とバカにしていました。

しかし、小泉八雲はそれらを素晴らしいと思って本にして世界に紹介したのです。そして、その話を八雲にしたのが奥さんである小泉セツさんです。

小泉八雲が書いたものを読んで日本にあこがれた外国人はたくさんいました。日本を研究する多くの外国人は小泉八雲の本のお世話になり、そしてそのもとにはセツさんの語りがあったのです。

ぜひ、ご覧ください。

▼無音の盆踊り

小泉八雲はセツさんの話を聞いただけではありません。自分自身で、日本のさまざまな土地を訪れ、そのときのことを書いています。彼が書いてくれたおかげでわかる当時の風俗もあります。

そのひとつが「盆踊り」です。

いま私たちが知る盆踊りは、派手な音楽付きの盆踊りです。私は六十九歳ですが、この世代では「オバQ音頭」などなつかしいでしょうし、いまは「ドラえもん音頭」などもあります。

しかし、これは昭和初期の「東京音頭」などの流行を契機に、戦後に定着したスタイルです。小泉八雲が『日本の面影』という本の中で書く盆踊りは、それとはまったく違います。

八雲が見た盆踊りは、音楽も歌もいっさいない、無音の中で踊られます。無音の暗闇の中で白い手の平がゆらゆら揺れる盆踊り。それが八雲の見た盆踊りでした。

八雲は次のように書きます。

＊＊＊＊

無数の白い手が、何か呪文でも紡ぎだしているかのように、掌を上へ下へと向けながら、輪の外側と内側に交互にしなやかに波打っているのである。それに合わせて、妖精の羽根のような袖が、同時にほのかに空中に浮き上がり、本物の翼のような影を落としている。足もすべて一緒に、繰り返し繰り返し動くので、それらの動きを眺めていると、キラキラ光る水の流れをじっと見ているような、まるで催眠術にでもかかったような感じがしてくる。

＊＊＊＊

白い手のひらをひらひらさせる動きは、死者を招く踊りであり、お盆はまさに死者のための宗教儀礼であったんだなぁと思わせます。

しかし、それだけではありません。「まるで催眠術にでもかかったような感じ」と書く八雲にとって、それはただ死者だけのための祭礼ではなく、死者と生者が一体となる神秘的な祭りだったのです。

私たちはお盆を、あの世のご先祖を迎えるお祭りだと思っています。しかし、八雲が出会った明治時代の盆踊りは、ただ死者のためのものだけでなく、生きている人のためのものでもあったのです。

これは僕たちのようなお坊さんではない、一般人が「浄土真宗とお盆」を考えるときに、とても重要なヒントになると思います。

▼浄土真宗のお盆

私はお坊さんでもないし、宗教学者でもない。ただの「役者」です。ですから、またまた勝手なことを書かせていただこうと思うのですが、阿弥陀寺さんのような親鸞聖人の開いた浄土真宗のお寺で「お盆」って、不思議だなぁと思うのです。

だって、阿弥陀様や親鸞聖人の教えによれば、一度でも「南無阿弥陀仏」と称えた人は、どんな人だって極楽往生できるのですから、死者の霊魂がこの世に戻ってくるという考えは基本的にはないはずです。

そう考えると、浄土真宗のお盆というのは、どうも他の宗派のお盆とは違うはずです。

で、私が勝手に考えている結論を言ってしまうと、浄土真宗におけるお盆というのは「報恩の場」ではないかと思うのです。

浄土に行って幸せになった故人を喜んだり、あるいは「いいなぁ。僕も死んだら浄土に行きたいなぁ」と思って、阿弥陀さまの救いや、そのような機会を与えてくださった親鸞聖人、そしてお寺の方たちに感謝する場、それが浄土真宗のお盆ではないかと思います。

家族や親族が集まり、お坊さんの読経や法話を聞いて、そしてともに念仏を称えることで、仏法に出遇う機会となる、それが浄土真宗のお盆です。亡くなった方だけでなく、生きている人のためのものでもある宗教行事ではないかと思うのです。

八雲は盆踊りに「死者と生者の交感」を見ましたが、これを浄土真宗的にいえば、「私たちは浄土にいらっしゃるご先祖にお念仏を称え、そして浄土にいらっしゃるご先祖が私たちを見守る」という相互関係の信仰になります。

この交感は、物理的な霊の往来ではなく、念仏を通じて心の中でつながるものなのです。

▼還相回向

でも、せっかく浄土に往生された故人やご先祖さまは、私たちのことなど忘れてしまいそうです。僕だったら、あちらで新しい仲間と楽しく修行しているうちに、この世のことなど忘れてしまいそう（笑）。

浄土に往生したご先祖さまが、わざわざ浄土から私を見守って下さるのはなぜなのでしょうか。

浄土真宗の教えに「還相回向（げんそうえこう）」というものがあります。これは、浄土に往生した亡くなった方がまたこの世に還ってきて、私たちを救ってくださるという教えです。

親鸞聖人は、阿弥陀仏の本願によって救われ、浄土に往生した人が、再び迷いの世界であるこの世に戻って、人々を導く姿を「還相回向」と表現しました。浄土にいらっしゃるご先祖さまは、この還相回向の心を持って、お盆に私たちのもとに思いを届けてくださるのではないでしょうか。

そう考えるとお盆でもご先祖さまは、単にお招きする存在、あるいは偲ぶ存在だけではなく、浄土から私たちを見守り、そして私たちを仏法へと導く存在だということができます。

お盆で家族が集まり、あるいは家族で阿弥陀寺にお参りに行き、お経を聴き、法話を聞くとき、そこには故人が浄土から「共に念仏を称えなさい」と呼びかける声が響いている。そして、私たちはお坊さんと一緒に「南無阿弥陀仏」と称える。

これは、八雲が盆踊りに感じた「死者と生者の一体感」を、より深い信仰の次元で体験するものです。盆踊りの無音のリズムが人々を一つにするように、還相回向は念仏を通じて生者と故人とを結びつけます。

▼楽しいお盆

死者と交感する場だった盆踊りが、派手な音楽の盆踊りに代わったように、伝統的なお盆の形は変化しつつあります。核家族化も進む中、コロナの影響もあり、かつては地域コミュニティが一丸となって行っていた盆踊りや法要がなくなったり、簡略化されつつあります。

しかし、またまた勝手な妄想をしますと、浄土真宗の教えは、こうした変化の中でこそ新たな意義を見出す柔軟性を持っているのではないかと思います。

お盆を「家族やコミュニティが仏法を共有する場」として捉え直して、さまざまな現代的な形式での法要や集いを開催するのも楽しいのではないかと思います。

以前はお盆が終わると、子どもたちと能や怪談の合宿を阿弥陀寺さんでしていました。これもコロナなどで、いまはお休みしていますが、子どもたちが参加できる念仏ワークショップや、あるいはその合宿に参加していて今は青年になった人たち向けのワークショップなど、阿弥陀寺の若いお坊さんたちに楽しい企画をしていただきたいと思っています。

数年前に京都のある有名なお寺から、作品の上演を頼まれたことがあります。そこは紅葉の時季には世界中から大勢の人が集まるお寺です。観光地としてとても有名なのですが「しかし、信仰を持って参詣する人がほとんどいない」と嘆かれ、私たちにその依頼がありました。

プロジェクション・マッピングも使い、池の上を歩くような上演をし、最後には遠くの山に阿弥陀様が出現するという演出です。

子どもや若者も楽しめる楽しい企画、しかし阿弥陀様や親鸞聖人の教えにのっとっている。そんなお盆ができるといいなぁと勝手に妄想しています。

▼お知らせ

NHKのEテレの100分de名著で放映された「平家物語」と「ウェイリー版源氏物語」が再放送されます。「平家物語」は深夜のまとめ放送、「源氏物語」は通常の放送です。

「平家物語」9月5日(金)
午前1時～2時40分
4日(木)
25時～26時40分

「源氏物語」11月
毎週月曜　午後10時25分
再放送
毎週金曜　午後3時5分